裸木

豊島与志雄

佐野陽吉には、月に一度か二度、彼の所謂「快活の発作」なるものが起った。

初めはただ、もやもやっとした、煙のような、薄濁りのした気分……。それが次第に濃くどんよりと、身内に淀んできて、二つの異った作用を起した。一つは、頭脳がひどく鈍ってきた。一種の毒気みたいなものが、頭の中に立罩めて、こみ入ったことは考えられなくなり、細かなことは感じられなくなり、あらゆる陰影や色合が失せて、変に露骨になるのだった。丁度白昼の薄曇りに似ていた。それからも一つは、肉体が急に精気づいてきた。血量がふえて、過剰になって、脾肉の

歎に堪えないという風に、何かしら激しい労働でもしてみたくなるのだった。そしてその別々な二つの作用が、或る時期にぴたりと一つのものにまとまる。と、彼はにやにやと不気味な薄ら笑いを洩した……。そういう状態を、彼は自ら、人間性の獣化と考えるのであった。

人間性の獣化ということは、必ずしも不名誉なことでも不愉快なことでもない。否それは却って、佐野陽吉にとっては、愉快な生々とした時間だった。世間体とか気兼とか矜持とか、そういった事柄から一歩外に踏み出したものだった。そして彼は、媚びを売る女達

のなまめかしい姿態と香りを眼前に浮べて、想像の中であれこれと選択をした。

――今日出かけて行こう。

ぴょんと踊りはねるような気持で、彼は敏子の方へやっていった。彼女の側には、生れて百五十日ほどになる赤ん坊が、母衣蚊帳の中にすやすや眠っていた。彼はその蚊帳の中へ、腹ん匍いになって頭だけをつき込んで、幼児の柔かい頬辺を、指先でちょいとつついてみた。

「あら、いけませんよ。今眠ったばかりじゃありませんか。」

「はははは、眠ってるな。」
その大きな笑い声になお喫驚して、眉根に小皺を寄せて、子供の方を覗き込んでる敏子の顔を、彼ははね起きながら眺めやった。
敏子の眉根が、やがてゆるんで、子供の寝顔の反射のように、無心の笑みが頬に上ってきた。と一緒に、彼もにこにこと微笑んだ。
「子供の寝顔っていいもんだなあ、」と咄嗟に、出たらめに、
「まるで海みたいなものだ。」
「え、海……。」

「海が見たくなっちゃった。」
「じゃあ見にいらっしゃいよ。」
「そうだな、今から行って来ようか。だが……。」
「なあに……。」
「まだ暑いし、……。」
「だから、海は涼しくていいんじゃありませんか。」
「そうかしら……。一緒に行こうか。」
「わたし?」睨むような甘えた眼付だった。「行けないことが分ってるものだから……。」
「なぜだい。」
「坊やをどうするの。」

「ああ、子供か。」
「嫌な人ね、白ばっくれて……。行っていらっしゃいよ。」
「うむ……だが、赤ん坊の顔を見てるのもいいようだし……。」
「まあ――……。」
赤ん坊は余り好かないと云って、抱きかかえることも少い彼だった。その平素の不満がちらと敏子の眼に閃めくのを、彼はすぐに取上げてみた。
「いや、僕は……赤ん坊の寝顔はひどく好きだよ。何だかこう、人間ばなれした清浄無垢って感じだからね。

赤ん坊というものは、始終眠ってると実にいいんだけれど……。」
「それじゃあ、人形も同じじゃありませんか。」
「そうだ、生きた人形……そんなものが生れると素敵だがなぁ。」
「また。……だからあなたは駄目よ。」
「へえー、駄目かなぁ。」
「何を感心していらっしゃるの。……行っていらっしゃいよ。つまらないことばかり云って、また坊やが眼を覚すじゃありませんか。」
「三界に身を置くところなしか。……行ってくるかな。

……どこだろう、一番近くて一番よく海が見えるところは……。」

品川か……大森か……羽田か……そんなことを独語しながら、彼はなおゆっくり構えこんで髯を剃り初めた。

――海なんかどうでもいいんだ。俺は……いや、そういう風なお前が可愛いいんだ。お前が可愛いいからこそ……。

そんな理屈はない筈だけれど、兎に角彼は、そういう場合の敏子が可愛いかったし、可愛いければ可愛いいほど快活な気分になって、華やかな巷の方へいそい

そと出歩いてゆくことが、ぴったり胸におさまった。
「夕飯は……まあどっかで済しちまおう。……少し帰りは遅くなるかも知れないよ。」
「遅いのはいつものことじゃありませんか。」
何の疑念もなく微笑んでる敏子の眼付に、彼も微笑で応じた。
「あ、全くだ。夜遅く、もう電車もなくなった街路（まち）を、ぶらりぶらり歩いてくるのは、実にいい気持のものだよ。お前には分らないかなあ……。」
「……………」
分ったとも分らないともつかない、うそうそとした

彼女の顔を、その姿を、彼は抱きしめて揺ぶってやりたくなった。それを我慢して、彼女の手を取りながら、踵を浮かし、爪先ですっすっと、ダンスの真似をやってのけた。

「いやよ、何をなさるの。」

「ははは、一寸ね……。」

「柄にもないわ。」

ばかばかしいといったような、それでも嬉しそうな顔を、彼女はしていた。

「ほんとだ、僕には散歩が一番いい。……じゃあ行ってくるよ。」

そして彼は家を飛び出した。
——家庭平和だ。俺は妻を愛してる。
——うまくやったな。
そういう二つの漠然とした思いが、その日一日の遊蕩の予想を、更に愉快なものとなした。

夕暮の街路——電車が走る、自動車が走る、自転車が走る。通行人の足が早い……。何もかもが行先を急いでいた。
その中で一人、佐野陽吉はぶらりぶらりと歩いていた。

——まだ少し早過ぎるな。

然しその場合、早過ぎるということは少しも苦にはならなかった。逸楽の予想を楽しむということも、プログラムの中の一つだった。

街路にも店頭にも、一杯灯がともっていた。慌しい中に都会は悠然と、夜の化粧を初めていた。

——俺の方は腹ごしらえだ。なるべく簡単にそして滋養分の多いものを……。

高い白い天井、行儀よく並んだ真白な卓子、水打った鉢の樹木、その中に彼は腰を下した。定食を避けて、気に入った料理を四五皿、それにビール……。

粗らな客……ボーイ達……それがみな赤の他人の、南瓜を並べたのと同じ頭ばかりだった。がその中で、向うの隅っこの卓から、俯向いてる一つの横顔が、次第にまざまざと浮出してきて……武田啓次……はっきり分った。

ビールのコップを前にして、石のようにじっとしていた。

――気がつかないのかな。

佐野は立っていった。

「おい」と肩を叩く気勢で、「どうしたい。」

友人を迎える彼の笑顔に向って武田は夢からさめた

ような顔を挙げた。
「やあー。」
「暫くぶりだね。」
「うむ。」
「どうしてるんだい、其後……。まあ、あっちの卓子に来ないか。」
「そう。」
　気の無さそうなのを、佐野は構わずにボーイを呼んだ。そして、卓子を挾んで向き合ってみると、一寸、極りがつかなかった。
　佐野の家に赤ん坊が生れたのと、武田が細君を――

正式の結婚ではなかったが同棲して二年余になる細君を——亡くしたのとが、殆んど同じ頃だった。その両方の混雑にまぎれて、親しく往き来してた二人ではあるがいつしか疎遠になっていた。

武田の顔は、目立って色艶が悪く、頬の肉が落ちていた。

「飯は？」

「もう済んだ。」

「もう……。何なら、今初めたばかりだから、一緒にやろうか。」

「いやほんとに済んだよ。」

だが、佐野には腑に落ちなかった。どこをどういう理由もないが、武田はまだ食事をしていないに違いないという感じが、しきりにするのだった。

「ほんとかい。」

「ああほんとだ。」

武田は頑として冷い顔をしていた。

佐野は食事を続け、武田はビールを飲んだ。

「行こう行こうと思ってて、つい行きそびれちゃってね……。」

「いやお互様だよ。……君んとこは皆丈夫かい。」

「ああ丈夫だ。」

「二人とも……。」

「二人とも、……うむ、丈夫にしてるよ。」

敏子の顔が、ちらと佐野の頭に映った。と同時に、擽ったいような変な気持になった。

「君も……もう落付いたかい。」

「落付いたと云やぁ、落付きすぎたくらいだが……。」

「そりゃぁいい。」そして佐野はじっと武田の顔を眺めた。「細君に死なれるってことは、実際経験してみなけりゃあ分らない、とそう僕は考えて、其後行きそびれちゃったが……。」

「いや、その方が僕は有難かった。なまじい変なこと

を云って慰められるよりも、そっと触れないでおかれた方が、どれほどいいか分らない。」
「ふむ、そんなものかなあ。」
「どうして……。」
「どうしてってことはないが……一体どんな気持だい。
随分困ったろう。」
「その当座は全く困っちゃった。だが……子供がないのでまあよかったが……何もかも済んでしまって、落付いてしまった後が、どうもいけない。」
「というのは……。」
「何かしら残ってるんでね。」

「そりゃあ残ってるだろうよ。」
「それがね、変なんだ。妻の品物がそこらにあるとか、僕の身の廻りの世話が行届かなくなるとか、そんなことなら当り前の話だけれど……。」
「まだ何かあるのかい。」
「ある。……だが、もうそんな話は止そうよ。」
「話したくないことなら、仕方ないが……。まあいいや、そのうち何もかもよくなるよ。実際人に死なれるってことは、嫌なことだ。僕にも母が死んだ時の覚えがある。然し、いつのまにか、遠い過去のことになってしまうものだよ」

「…………」
武田は黒ずんだ眼を瞬いて、陰鬱な表情をした。その色艶の悪い痩せた顔が、電燈のだだ白い光を受けて、仮面のように見えた。
「凡ては時の問題だ。余りくよくよするものじゃないよ。」
「……ない筈なんだ。普通に考えればおかしいよ。」
仮面の顔が急に真実になってきた。「然し、君にだってこういう経験はあるだろう。室の中の道具を、他の室に移すとする……例えば、簞笥だとか戸棚だとか、長くいつも同じ場所にあった道具を、俄に取りのける。

すると、何気なくその室にはいって、びっくりする。今迄箪笥のあった場所だけが、全く空虚になっている。空虚は、他の何物でも満されない。今迄あった箪笥をもって来なくっちゃあ、到底満されるものじゃない。

……分るだろう。」

「うむ……。」

「それと同じことなんだ。妻が死んでから、僕は、生活が不自由だとか、いろんな思い出の品があるとか、そんなことにはもう平気でいられる。けれど、妻の姿だけのものが……物質的な立体的な……妻の肉体そっくりなものが、僕の周囲で空虚になっているのだ。…

…空虚と一口に云うが、空虚だって一つの形を取ることがある。妻の姿通りの空虚が、家の中にそこらに動き廻ってる。どんなものを持ってきてもふさげられない……それそっくりのもの、妻の肉体をもってこなくちゃふさげられない、そういった空虚が、家の中にふわりと浮んで動き廻ってるんだ。」

「…………」佐野は答えにつまった。

「僕は、昔の幽霊なんてものは、結局そういう空虚を指すんだと思う。幽霊を何か実体があるように考えるのは間違ってる。それはただ、一定の形を具えた空虚じゃないかね。生きてた当の人間の肉体そのものでし

かふさげられない空虚だ。ただ、眼に見えなくて、感じられるだけのものだが……然し、もし空虚そのものが眼に見えるようになったら……。」
「そりゃあ……困る……。」
「困るとか困らないとかいう問題じゃないよ。全く思いもよらないことなんだ。」
「誰だってそんな……。だが、考えてみれば、それも愛情のせいかも知れないよ。」
「愛情……そういった気持とは全く別なものだ。僕は何だか不気味な恐ろしい気持さえしてるんだから。」
佐野も聞いてるうちに何だか変な気持になりかかっ

ていた。それは単に気のせいだ、と云ってしまいたかったが、武田の調子や顔付を正面にしては、そうも云いきれないものがあった。

暫く黙り込むと、武田の顔はまた憂鬱な仮面みたいになっていた。

「外を少し歩こうか。」

「うん。」

街路の方が、燈火の度は遙に淡かったけれど、佐野には、ずっと明るいところへ出たような気がした。多くの通行人の頭の上を軽い風が吹き過ぎていた。空高く、星が二つ三つ光っていた。方々で、ラジオの喇叭

から、無関心な騒音が流れ出ていた。
武田は何かに怒ってでもいるかのように、黙って真直に歩いていた。単衣に兵児帯、そして太い支那竹のステッキをついて……。
——一定の形を具えた空虚……動き廻ってる空虚……。
佐野はそんなことを頭の中でくり返した。
暫くぶりに、レストランの中でふいに現われて、変なことを饒舌って、仮面みたいな憂鬱な顔をして、今黙々として歩いてる武田自身が、形はあるが空虚だったら……。拳固でどやしつけて、その拳固がすっと突

きぬけたら……。

佐野は我ながらばかばかしくなった。とたんに、衝動的に、武田の肩を叩いた。骨立った薄っぺらな固い感じがした。

「え？」

振向いた武田より佐野の方が、なおびっくりしていた。

「だって……おかしいじゃないか。」

何がだってだか……ただそんな風に云ってみた。

「何だい、だしぬけに……。」

好奇な鋭い眼付は、武田の存在を生々とさした。

「なに……一寸……。」

考えてるうちに佐野は落付いてきた。愉快そうな顔をした若い女が、幾人も通っていた、男も……。

「こんなことがあるよ。結婚して二三年すると、一種の倦怠期と云うか……兎に角、夫婦生活に興味がなくなって、淡い幻滅の時期がくる。誰だってそうらしい。そして自由な独身者を羨んだりするようになる。夫婦生活というものが、変に束縛という風にばかり感じられて、細君が亡くなったらと、そんな想像までするようになる。勿論、死なれるのは困るが、そっと消えて無くなったらと、まあそれくらいのところだね。それ

だって、男性通有のことだとすれば、そう軽蔑も出来ないよ。」
「そりゃあ、細君を持ってる男ばかりが考えることだ。」
「そうかも知れないが……然し、物事は考えようだからね。夫婦生活なんて、二三年で沢山なものかも知れないよ。」
「君もそうなのか。」
「僕……。いや、僕は、妻を愛してるし、妻に消えて無くなって貰いたいとも思ってやしないが……それでも、何と云ったらいいかなあ……籠から脱け出したく

なることもあるよ。」
「籠から脱け出すって……。」
「まあ何だね、凡てを忘れて、自由に飛び廻る……とでも云うのかしら。」
「いつでも君は自由に飛び廻ってるじゃないか。」
「それがね……少し。」
佐野はうそうそと微笑んだ。昼間からのことが、いろんなことが、頭に浮んでいた。
「どうなんだい。」
「まあいいや。……そんなことよりか、今晩、これから改めて飲みに行こうか。たまには気晴しもいいよ。」

「飲むのはいいが……。」
武田は立止って、佐野の顔をじっと覗き込んできた。
「君はこの頃、遊び初めたんだね。」
「いや、遊ぶというほどじゃないよ。ごくたまに……。」
「女を買うのか。」
「………。」
快活に微笑んでた佐野は、意外なものにぶつかった。
武田とは以前時々、待合にこそ行かなかったが、芸者を呼んで騒いだこともあった。その武田が……。
「そして細君は……。」

軽い驚きから一転して、佐野は愉快なそして道化た調子になった。

「大丈夫さ。何も知らないよ。また知ったとて嫉妬を起すほどのことでもないからね。僕はすぐに相手の女の顔も名前も忘れちまうんだ。まあ、たまに家庭外の飯を食う、それくらいのことにしか当らない。そして元気になりゃあ、それでいいじゃないか。」

「そんなばかなことが……。」

「実際そうなんだから仕方ないよ。何でもない、一寸した刺戟性の香料みたいなものさ。……香料と云やあ、面白い話があるよ。僕の友人に医学士がいてね、ふと

考えついて、病院の実験室で女の鬢附油を使ってみた。何でも硝子と硝子とを密着さして空気の流動を防いで、その硝子器の中で血液中の酸素を調べたりなんかする実験なんだ。その硝子を密着させるのに、普通はワセリンを使用するんだが、粘着力がわりに弱い。そこで鬢附のことを思いついて、やってみると、なかなか成績がいい。……ところがね、鬢附をねっていると、その匂いがぷんと鼻にくる……。薬品の香のこもった厳粛な実験室だ。その中で鬢附の匂い……そして、色街(いろまち)のことがふっと頭に浮ぶ……。そうなると、その日は駄目だが、一晩遊んで翌日からは、平素に倍して実験

に身がはいる……と云うんだ。普通の男にとっては、遊びなんていうものは、それが全部で、そしてそれだけのものさ。」

話してるうちに、橋のところに出た。油ぎったどろりとした水が、波紋一つ立てないで、街燈の灯を映していた。

「じゃあ僕は、ここで失敬しよう。」

武田は突然そう云った。憂鬱な仮面になっていた。

「え……一緒に一杯やるんじゃないのか。」

「いや、またこの次にしよう。今日は一寸用があるから……。」

「だって……。」

「そのうちに行くよ。……そう、赤ん坊を見に行こう。」

「………。」

佐野は呆気にとられた。一人になってもぼんやりそこに佇んでいた。やがて、俄に変梃な気持になった。

——さて、どうするかな。行っちまうか。

街路の灯と明るい商店と見ず識らずの通行人……。その中で、肌寒いほど一人ぽっちの彼だった。

四五日後の午後だった。

「あなた、今日武田さんがいらっしゃいましたよ。」
佐野が外から帰ってくると、敏子はさも大事件のように彼へ報告した。
「ほう、武田君が。」
「ええ。随分長く、二時間くらい待っていらしたが、お帰りなさらないので……。」
「何か用かしら。」
「尋ねてみたんですけれど、別に用はないんですって。……こないだ、あなたはお逢いなすったんですってね。」
「あ、そうそう、話すのを忘れていたが……。」

佐野はぎくりとした。折が折だったので、後になって、二三日前に逢ったという風に、漠然と話すつもりだったが、まだそのままになっていた。
敏子は一寸不審そうな眼付をしていた。
「二時間も……何を話していったんだい。」
「何ということはなく……口を利くのが面倒だって風に、黙りこんで子供ばかり見ていらしたわ。奥さんがなくなって、やっぱり淋しいんでしょう。」
「そりゃあね……。」
「そうそう、あなたと同じようなことを云ってらしたわ。子供の匂いはどこか果物の匂いに似てるって…

…。」
「そうれごらん。」
「だけど、子供の寝顔を見てると海を思い出すって、そうあなたが仰言ったことを云うと、ふいと大きな声で笑い出しなすったわ。わたしびっくりしちゃった。」
「ふーむ、分らないんだよ。」
「だって、何があんなに可笑しいんでしょう。」
「何か変なことを思い出したんだろう。……それはそうと、訪ねていってみようかな。」
「今晩か明日か、また来ると云っていらしたわ。」
「今晩か明日……やはり何か用があるのかしら。」

佐野は一寸気にかかった。

先日のこと……よしない時に出逢って、よしないことを饒舌っちゃった、というより寧ろ、その全体が不安なことに思い出された。

敏子も何だか気がかりらしい様子をしていた。

「いや、何でもないことかも知れない。」

「だけど、変だったわ、時々じいっと坊やの方を見ていらっしゃる様子が……。わたし一寸恐くなりそうだった。」

「ははは、ばかな。」

——なんだ、そんなことか。

佐野は笑ってそれきりにした。

けれど、翌日の晩、武田が訪ねてくると、何故ともなく、二人とも玄関へ出ていった。

「やあー、また来ましたよ。」

その調子ばかりでなく、様子に、佐野は一寸面喰った。先日の憂鬱な影が薄らいで、どこか無邪気なそして押しの強い、いつもの武田になっていた。

「僕の方から行こうと思ってたところだった。」

「なあに、別に用はないんだから……。一寸子供の顔を見たくなってね……。」

「…………」

佐野は苦笑した。

「愉快なもんだね。」

「ほう、そんなに気に入ったのかい。」

「ああ、すっかり気に入っちゃやった。」

「まあー、何を云っていらっしゃるの。」

「いや本当ですよ。佐野君なんか、家に子供がいるんだから、ふらふら出歩かなくったって、子供の寝顔でも見てる方が、よっぽどいいんだがな。」

「そんなら賛成よ、わたしも。あなた、どう……。」

「つまらないことを……。いやでも毎日見なくちゃならないじゃないか。」

「そう……義務となっちゃあ……駄目かな。」
「あら、義務じゃありませんよ。自然の情愛なんですもの。」
「そうです。義務は悪かった。」
「そんなこと、どうだっていいじゃないか。つまらない……。」
「うん、どうだっていい。」
冗談のような真剣のような、一寸摑みどころのないものが、武田の調子に現われていた。佐野と敏子とは、何となく武田の顔を見守った。
敏子が席を外すと、佐野は武田の方へ近々と視線を

寄せた。
「あれから……こないだと、気持が変ったようだね。」
「僕が……変りゃしないよ。」
武田は口を尖らせて見返してきた。
「然し、あの時はひどく君は陰気だったが……。」
「あ、そりゃあ、僕自身だって、時々ひやりとすることがある。」
「冷りとする。」
「何だか変に物が……周囲の世界が、象徴的に神秘に見えてくることがあるんだ。そんな時、亡くなった妻の姿……一種のイメージだね……それが、そこだけぽ

かっと空虚になって、真空というほどになって、はっきり浮出してくる……。」

「例の……形体ある空虚か。」

「それで僕は、変に堪らない気持で外へ飛び出す。そしてむやみと……彷徨するんだ。犬みたいだね。何かしら探し求めずにはいられなくなる。街路（まち）を通ってる女達の顔を、一々覗き込んでることがある。自分でも知らず識らずにだよ。気がついてみると……。」

　武田は眉根に深い皺を刻んで、老人のような額をしていた。

「それじゃあ、少し遊んでみるといいんだよ。」

「ばかな、そんな真剣な道楽が出来るものか。ただ酒だけはよく飲むが、露骨な肉体は堪らない。」
「露骨な肉体……。」
「そうじゃないのか、君は……。」
「僕の……。そんなんじゃないよ。ただ……。」
佐野は言葉につまった。そうだともそうでないとも云えない気がした。
「鬢附油の匂いなんて、そうじゃないのか。」
「単なる匂いさ。それに、僕はそう遊んでやしないよ。」
「そうかも知れないがね……。」

「いや本当だ、誤解しちゃ困る。あの晩は、どうも話の調子が変だったものだから……。」
「いや……君に逢ってよかった。……度々やって来て、邪魔じゃないか。」
「度々って、まだ……二度きりで……。」
「うん、これからのことさ。」
「いやちっとも……。気が向いたら、毎日でもいいよ。」
「毎日は来ないがね。……実際、君んところの赤ん坊はいい。僕はあれから、どんな赤ん坊だか一つ見てやれと、そんな気になって……。」

「すると、案外上等だったってわけか。」
佐野は首を縮こめて苦笑したが、武田は落付払っていた。
「上等だかどうだか、そいつあ分らないが……一体赤ん坊というのは、素敵なものなんだね。」
「どうして……。」
「全く自然で生々としてる。」
「当り前じゃないか。」
「然し、随分いじけた赤ん坊だってある。」
「そりゃあ、病気なんだろう。栄養不良とか、どこか悪いとか、兎に角健全じゃないんだ。健全な赤ん坊な

ら、どんな赤ん坊だって、自然で生々としてる筈だよ。一番生育の盛んな、伸び上ろう伸び上ろうとしてる時なんだから……。」

「いや僕は精神的に云ってるんだ。」

「精神的にだって、肉体的にだって、赤ん坊にとっちゃ同じじゃないか。つまらない解釈なんかつけるから、変なものになっちまうんだ。」

云ってるうちに佐野は突然腹が立ってきた。何物とも知れないものが、胸の底で湧き立ってきた。

「別に解釈をつけ加えるってわけじゃないが……。全く分らない世界なんだからね。」

「分るも分らないもない、ありのままの世界だよ。」

暫く黙ってた後で、佐野は敏子を呼んだ。

「え、なあに……。」

「坊やを連れてきてごらん。」

「まあー、どうして……。今眠ってるじゃありませんか。」

「いいんですよ、ほんとに、そんなことをしなくたって……。」

「一体どうなすったの。」

「なに、どうでもいいことなんです。」

武田と敏子とからじっと見られて、佐野は一寸心の

置き場に迷った。

「君が変なことを云い出すものだから、実地に証明してやろうと思ったんだが……。」

「君の方だよ、変なことを云い出したのは。」

「変じゃない。ありのままじゃないか。」

「一体何のことなの、それは……。」

敏子は不思議そうに二人の顔を見比べた。

「赤ん坊の世界が……何だったかな……。」

佐野にも一寸何だか分らなくなっていた。

「ははは、忘れちゃった。」

笑いにごまかしたが、まだ何か心の底に残っていた。

武田は無神経なほど落付払っていた。或は何にも感じなかったのであろう。敏子と、母乳がどうだとか牛乳がどうだとか、そんなことを話し初めた。

佐野は口を噤んでそこに寝そべった。天井を仰ぎながらやたらに煙草を吹かした。

やがて武田が帰って行くと、佐野は急にまた腹が立ってきた。そして不思議にも、それが我ながら腑に落ちなかった。顔を渋めて家の中を歩き廻った。

「どうなすったの……何を怒っていらっしゃるの。」

「何にも怒ってなんかいないよ。」

「だって……。」

「自分にも分らないから、怒ってない……ということにはならないかな。」

独語のように吐きすてて、なお室の中を歩き廻った。

武田は屢々やって来た。昼間佐野の不在な時が多かった。そして、敏子を相手に別段話をするでもなく、子供の母衣蚊帳の近くに寝そべって、子供の方を覗いたり、ぼんやりしたりして、それから突然思い出したように帰っていった。

子供が眼を覚して、蚊帳から出されて、両親の膝の上で飛びはねる時なんか、武田は首をひねって眺めな

がら、しきりに一人で感心していた。
「武田さんて、可笑しいんですよ。うちの坊やにすっかり惚れこんじゃって……。」
「お前に惚れこんだんじゃないのかい。」
「なら……まだいいけれど……。」
「ばかな。」
次々に敏子から聞く武田の話に、佐野は一種懸念に似た関心を覚えてきた。
いろんなことがあった。
——赤ん坊は、日によって感じがちがう。林檎のような時もあるし、水蜜桃のような時もあるし、桜ん坊

のような時もある。

——赤ん坊は、変に股が太って足先が痩せて、腕が痩せて手先が太ってるものだ。

——赤ん坊の眼は、澄んではいるが、本当の美しさは少い。唇は醜い。一番美しいところは手足の爪だ。

——赤ん坊の無意味な声音は、時によって、ひどく表情的だったり、没表情だったりする。声音に表情が多い時ほど、精神活動が盛んなのだ。

——赤ん坊には全く果物みたいな匂いがある。匂いの強い時ほど栄養がいいのだ。

——赤ん坊の声音の表情と身体の匂いとが大抵反比

例するのは不思議だ。栄養がいいほど精神活動も盛んな筈だが、或いは、栄養がいいと精神的欲求がとまるのかも知れない。
——赤ん坊の皮膚は、産毛ばかりで、黒子(ほくろ)も雀斑(そばかす)も全くない。
佐野には黒子が多かった。敏子には薄い雀斑があった。
「ははは、坊やを僕達と比較して見てるんだね。」
「武田さんにだって、随分雀斑があるじゃありませんか。色が黒いから目立たないけれど……。」
「だが、そんなにくわしく坊やを観察して、どうする

んだろう。」

「だから、坊やに惚れこんでるのよ。」

「冗談じゃないよ。」

実際冗談じゃなかった。家庭内の秘密まですっかり発かれる……というほどではないが、変に自分達の生活まで白日に曝される、とそんな気が佐野にはした。不愉快だった。

佐野が家に居合せる時でも、武田は書斎の方へは通らないで、子供のいる方へ勝手にはいりこんでいった。それを敏子は親しく迎えていた。

八畳の室。日射(ひざし)の遠い北の窓近くに、母衣蚊帳が拡

げてある。赤ん坊がすやすや眠っている。傍で敏子は針仕事をしている。引きつめた束髪に結っている。それが彼女によく似合って、年齢よりは若く見せる。額の広い細長い顔だから、大きな束髪よりも引きつめたものの方が、若々しくなるのである。鼈甲の櫛が一つ、程よい装飾をなしている。その母と子とから少し離れて、縁側に、武田が寝そべっている。新聞や雑誌を退屈しのぎに拡げてはいるが、別に読むという風でもない。ぼんやり空想に耽ったり、赤ん坊の方をじっと眺めたりしている。長い髪の毛が乱れている。櫛で綺麗にかき上げてもすぐ乱れてしまう、細いしなやかな毛

である。その頭髪と妙な対照をなして、痩せた浅黒い顔が固く骨立っている。冷い固い感じの、色艶の悪い皮膚である。眼だけがひどく敏感に、黒ずんだり閃めいたりする。赤ん坊の方を見る眼付が、時々執拗になる。その度に、敏子は変に赤ん坊を庇う気配が見える。と同時に、彼女は得意げである。勝ち矜ったようでさえある。世間苦に染まない呑気な彼女に、そんなことは極めて珍らしい。にも拘らず、殆んど本能的な自然なものに見える。取り繕ったところが少しもない。その得意げな矜りで、彼女は赤ん坊を庇護してるかのようである。武田は一寸、苛ら立つように見える。が瞬

間に、ひどく淋しそうな眼付をする。敏子の頬にかすかな微笑の影が漂っている。やがて凡てが消えて、静かな時間が続く。凪ぎ……。凪ぎの底から、赤ん坊がむくむくと動き出す。敏子も武田も、その方に眼を注ぐ。赤ん坊は変な声を立てる。泣くのでも叫ぶのでもない。「おうお目(めめ)がさめたの。」敏子が寄ってゆく。赤ん坊は大きな声を立てる。蚊帳が取りのけられて、白い布団、白い薄い毛布、白い着物、その何もかも真白な中から、赤い顔と赤味がかった髪の毛とが、もがき動いている。「おう可哀そうに、おっぱいの時間でしょう。」ぐらぐらした首筋、きつく握りしめたまん円い手、

足をからめた長い着物の裾、その変に頼りない危っかしい全体が、敏子の膝に抱かれる。「御免下さい。」彼女はくるりと向うを向いて、襟を引き開けながら、赤ん坊に乳房を含ませる。甘っぽい乳のかすかな匂い。武田は大きく息をついて、庭の方を見る。樹々の一葉一葉に、輝かしい日が射している。静かな午後……。「そうれ、小父(おじ)ちゃま、ばあー……。」据りの悪い頭をきょとんとさして、にこにこっと笑ったり、うぐんうぐんと饒舌ったり、時々思い出したように、機械人形のように、足をぴょんぴょん蹶り立てる。ほーと云った風に、武田が眼を円くする。眼だけが円くて、その

ため額に皺が寄って、可笑しな老人じみた顔付である。敏子は白い歯並で晴れやかに、赤ん坊へ微笑みかけている。武田は抱かしてくれとは云わない。敏子も抱いてくれとは云わない。そこに妙な距てがある。その距ての中で、赤ん坊はぴょんぴょん跳ねている。女中がやってくる。敏子の手から女中の手へと、赤ん坊は往ったり来たりする。武田は赤ん坊の動作に見とれている。「まあー、何を感心していらっしゃるの。」「いや実際……。」面白いと云っていいか素敵だと云っていいか分らないのを、武田は不器用な顔付で示す。敏子と女中とが笑う。「自分も昔は赤ん坊だったかと思う

と、不思議な気がしますよ。」「どうして……。」「どうしてって……まあかりに、一度も赤ん坊を見たことのない者があるとすれば、その者は屹度自分が昔赤ん坊だったことなんか、夢にも知らないでしょう。」「夢にくらいみるかも知れませんよ。」「さあ……。」僕は一度も赤ん坊の夢を見たことがないんです。」「ほんとに。」「ええ。」敏子は信じられないという顔付をする。武田は淋しく微笑する。それから、ふいに憂鬱な仮面みたいになる。赤ん坊が快活に躍り跳ねている。静かだ……。

佐野は、自分一人がその群から圏外に出てるように

感じた。
——こいつはどうも少し変梃だ。
彼はまじまじと敏子の眼を覗きこんだ。
敏子は聊かたじろぎもしなかった。以前より落付も出来、重みもつき、前よりいくらか美しくなり、肉附も血色もよくなっていた。
「あなたはこの頃、何だか変に軽っぽくなりなすったようよ。どうなすったの。もう一人前のちゃんとしたお父さんじゃありませんか。」
「うむ、そうだそうだ。だから僕も考えてるんだ。」
「何を…。」

「しっかりしようとね。」
「あれですもの、じきに。冗談だか真面目だか、あなたはちっとも区別がないわ。」
「…………」
彼はいきなり敏子を抱き上げた。彼女は軽かった。それが満足なような不満なような、訳の分らない気持で、彼はふらふらと外に出歩いた。

佐野は夜更けてから、タクシーで帰ってきた。電車通りの角で降りて、それから三町ばかりのところを歩いた。

しいんと寝静まった薄暗い横丁だった。夜気が冷く頬に触れた。

彼はそういう場合のいつもの通り、半夜の相手の女のことなんかはもう遠く忘れかけていた。そして平素よりも遥に、落付いた真面目な気持になっていた。しみじみと人生を考える、そういう心の状態だった。

——俺は一体何のために生きてるんだ。

うそうそとそこいらを嗅ぎ廻ってる犬の側を、親しい気持で通りぬけて、ふと、ひどく淋しくなった。真裸で一人つっ立ってるような、肌寒い感じだった。

門をはいって、締りをして、家にはいろうとすると

彼はびっくりした。遅い折にはいつも引寄せてある玄関の戸が、一枚開け放したままだった。

更に彼がびっくりしたことには座敷に電燈がついていて、それに黒い布の覆いがされて、ぼうっとした中に、敏子が端然と坐っていた、子供が真赤な顔で眠っていた。

「どうしたんだい。」

玄関に出迎える筈なのを、敏子は坐ったまま、冷い一瞥で彼を迎えた。そしてそのままの眼付で、子供の方を指し示した。

「え、病気か。」

水枕の上の頭が、かっとした、底力のある粘っこい熱さだった。それと変に不調和に、不気味なほどに、安らかな静かな息使いだった。そして昏々と眠っていた。小皺の多い唇が乾いていた。

夕方まで元気だったのが、八時頃から、俄に燃えるように熱くなって、ぐったりしてしまった。三十九度三分の熱だった。医者が来た。神経性の発作的な熱かも知れないが、も少し経過を見なければよく分らない、そう云って、透明な水薬をくれた。一切乳を与えないで、渇く時にはその水薬をやるのだそうだった。――

敏子は低い声で、棒切のような話方をした。

「どこに行ってらしたんです。武田さんまでが心配して待ってて下さるのに…。」
「え、武田が…。」
佐野はどこに行ったとも答えなかった。着物を着換えに立上った。
茶の間で、武田はぼんやり煙草を吹かしていた。
「君にまで心配をかけちゃって……。」
「なあに……。」
話のつぎほがなかった。
「ひどいのかしら。」
武田は敏子と同じようなことを云った。ひどく不機

嫌そうだった。

佐野はまた子供の方へやって行った。

「今日……。」出たらめに友人の名を挙げて、「……に逢ってすっかり話しこんじゃったものだから……。」

「分りそうなものじゃありませんか。」

「そんな……分るものか。」

「武田さんだって、変な気持がしたから来てみたと云っていらしたわ。」

「変な気持……。」

「虫が知らせるってこともあるでしょう。」

「そんなじゃないよ。父親の僕に虫が知らせないんだ

から、大丈夫だ。」

子供の額はやはり熱かった。いつ覚めるとも分らない底深い眠りだった。

「氷で冷したら……。」

「余り冷しちゃいけませんって。」

強固を通りこして冷酷とも云えるほどの敏子の様子だった。一心に子供を見張っていた。佐野は指一本差出す余地がないような気がした。

いつまでも同じような時間だった。さめた酒の酔が、頭の奥に変にこびりついていた。

佐野はまた武田の方へやっていった。

武田の顔は憂鬱な仮面になっていた。じっとして動かなかった。

「起きてても仕様がない。寝たらどうだい。泊っていってもいいいんだろう。」

「うむ。……だが寝ても仕様がない。」

「もう二時近くだよ。」

「…………」

露が霜にでもなりそうな、しいんとした夜だった。

「君は、どこへ行ってたんだい。」

突然、電燈の光を受けた武田の顔が、薄黒く冴えてきた。

「どこにって……。」

「不都合だよ、こんな時に……。」

「然し……知らなかったんだから……。」

「知らなくっても、いいことじゃない。」

「そうかなあ。」

佐野は腑に落ちない顔付をした。悪い……と云えば悪いようだけれど、さてその悪いという実感が少しも胸にこなかった。

「赤ん坊はいい。病気になってもちっとも苦しまないから。あれで、ひどく苦しんだら、君は堪らなくなる筈だ。」

「そんなに悪そうでもないよ。」

「悪くないように見えても、悪いように見えても、同じことじゃないか。病気は病気だよ。僕は、妻が死んでから後で、なぜもっとよく看病してやらなかったかと、それが切なかった。果して妻を愛してたかどうか、それさえも分らなくなってくる……。何もかも生きてるうちのことだ。」

佐野はぎくりとした。

「え、医者が何か云ったのかい。」

「医者……。」

「危険だとか……何か……。」

「何も聞かないよ。」

「そうだろう。そんなに悪い筈はない。」

「誰でもそう思うものだよ。僕もそう思っていた。愈々いけなくなる前、妻は一寸元気づいていたよ。それが、これなら大丈夫だと思っていると急にいけなくなった。眼に見えてじりじりと、深いところへ落ちこんでゆくようで、どうにも出来やしない。」

「…………」

佐野は武田の顔を見つめた。

「そりゃあとても堪らない気持だ。」

「…………」

その時、不思議なことが佐野に起った。或る力強い何とも云えない皮肉な快感から、彼はぼんやり微笑んでしまった。それから始末に困った。

彼は立上った。

「大丈夫だ。来てみ給い。」

病室の方へ歩いていった。武田はついて来た。

電燈の覆いを取ると、ぱっと明るくなった。

「まあー、何をなさるの。」

「なに大丈夫だ。」

真赤な顔だった。額は汗ばんで熱かった。呼吸は静かだった。心持ち凹んだ眼のあたりを、無意識にしか

めていた。
「よし、僕がついていてやる。何でもないさ。」
佐野は枕頭に坐りこんだ。
「いけませんよ。大きな声をなすっちゃ……。」
敏子は立上って、電燈の覆いをした。
「ほんとに、もう宜しいんですから、お寝みなすって下さい。」
「ええ。」
武田は中腰にぼんやりしていた。
「みんな寝ておしまいよ。僕がついていてやるから。」
佐野は両腕を組んで構えこんだ。火鉢に湯気が立っ

ていた。黒紗にこされた光が、柔かな暈を室全体に投げていた。子供の呼吸は静かだった。

佐野は次第に気持が白けていった。何だかばかばかしくなった。

彼は室の隅に布団を拡げて横になった。そして眠ってしまった。何にも覚えなかった……。

翌朝、彼は敏子から呼び起された。ちゃんと毛布をかけて寝てるのだった。室の戸は開け放されて、晴れやかな朝日がさしていた。

子供は大きなきょとんとした眼で、不思議そうに天井を見廻していた。熱が三十七度近くに下っていた。

「昨夜（ゆうべ）眠ったのは、あなたと女中だけですよ。」

「賢い者はよく眠るさ。」

彼は腹匐いになって、子供の柔かな頰辺をつっ突いてみた。金色に透いて見える細やかな産毛に被われた皮膚が、無心にひくひくと動いた。

蒼ざめて雀斑の浮いて見える敏子の顔が、彼には珍らしかった。それよりもなお、縁側に蹲って涙ぐんでる武田の姿が可笑しかった。肩をまるめて、泣いてるような恰好だった。

それから間もなく、武田は婚約した。

「いい赤ん坊を拵えてやるんだ。」
ちっともそれらしくない陰欝な顔で武田は云った。
「ははは、僕んとこと競争してみ給い。」
佐野は愉快になった。そしてその話を敏子にした。
敏子は笑わなかった。
「やっぱり、わたしをいくらか、想っていらしたんじゃないかしら。」
「ばかな、自惚れもいい加減にしないか。」
佐野は何かしら、生活の自信というようなものを持ち初めていた。愉快そうに笑った。

底本：「豊島与志雄著作集　第三巻（小説Ⅲ）」未来社
１９６６（昭和41）年８月10日第1刷発行
初出：「新潮」
１９２６（大正15）年９月
入力：tatsuki
校正：門田裕志
２００８年1月16日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。